
魔法少女リリカルなのは StrikerS ～小さな少年の小さな勇気～

海翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Strikers ～小さな少年の小さな勇気～

【Nコード】

N0250Z

【作者名】

海翔

【あらすじ】

機動六課設立2年前フェイト・T・ハラOWNによって救われた少年。その少年はフェイトの養子となり機動六課に出向する。そして、これから大きな事件へと巻き込まれる。若き魔導師の生き様を描いた物語。魔法少女リリカルなのは Strikers ～小さな少年の小さな勇気～ 始まります。

PL 出会い

PL

Sideフェイト

2年前……

私はその日執務官の仕事である組織を落とす段取りをしていた。その組織は魔導師臓器売買を主とする組織で、本局の魔導師もかなりの数が殺されている。

組織はそこそ大きく、相手も魔導師を雇っているためこちらも魔導師の平均ランクをAA以上にする必要がある。

本局魔導師でも空戦、陸戦にとわずAAというのはそれほど多くない。

どう頑張っても少数精鋭の部隊になる。

「テストロッサ・ハラオウン執務官、準備が整いました」

「わかりました」

今回召集した人員の準備が整い、転移の準備も終了した。

「これより、敵本拠地に行きます。皆さん死なないでください」

そう言って、すぐに敵の本拠地に転移、臨戦態勢をとる。敵が襲ってくる。

そう思って全員がデバイスを前に突き出す。

しかし――

私たちの前に現れた光景は彼らの想像をはるかに超えるものだった。

いや――

私も度胆を抜かれた。

私たちの目の前にあったのは――

死体

――ただそれだけだった。

それもただ殺されているだけではない。

ある者は腸を^{はいつた}ぶちまけ、

またある者は頭を破壊され、脳をあらわにし、

またある者は首から上が切断され、

またある者は下半身が丸ごとなくなっている。

そんな死体――

いや

”もの”だった。

それも理解した瞬間、死体が放つ独特の異臭が鼻を突く。
胃の中のもものが逆流するのを感じる。

それを必至に堪える。

しかし、後ろの隊員は我慢できずに嘔吐する。

吐き気を耐えきった私は隊員に告げる。

「気分の優れない者は艦隊に引き返してください」

それを聞き隊員たちは次々と戦場を離脱。

結果残ったのは私を含めたら名だけだった。

「それでは行きます」

ゆっくりだけど確実に一步一步進み続ける。

もちろん警戒は怠らない。

そばらく歩くと、小さな人影が見えた。
ゆっくりと近づき、影と私たちの距離は10mくらいになった。

「……」

近づいたからわかるが影の正体はまだ体も出来上がっていない子供だった。

背丈からして10歳もない。

その少年は右手に短いナイフを握っている。
左手にもよく見えないが何かを握っている。

「あなたはここで何をしているのですか……？」

私は少年に聞く。

しかし、少年は何も答えない。

代わりにゆっくりと振り返ろうとする。

「……」

私もバルディッシュを構える。

少年は振り返る。

少年の顔が光にさらされる。

「——っ!!」

私は少年の表情に驚く。
少年は……泣いていた。
表情自体は笑っている。

それでも、眼からは涙が流れている。
少年はそんな表情のまま告げる。

——ボクヲコロシテクレルノ？——

「な、に…？」

一人の隊員が驚いたようにつぶやく。
少年は尚も続ける。

——ハヤクボクヲコロシテ——

少年は一步づつこちらに近づく。
少年が近付いたおかげで少年の全体を光が照らす。
少年が照らされた瞬間、私たちに戦慄が走った。
少年の左手にはさっき見た首が切断された死体の頭が握られいた。

——ネエコロシテヨ？——

少年はまた近づいてくる。
私たちは一步下がる。
しかし、ここで私は考えた。
なのはならこの状況をどうするだろう、と。
なのはならあの子に砲撃を浴びせるだろうか？
なのはならあの子を殺すだろうか？
なのはならあの子を見捨てるだろうか？

答えは——

否——

彼女ならこの子を助けるだろう。

彼女はこの子と話すだろう。

——彼女なら——

そう考えていたら、勝手に体が動いていた。

「私は、私たちは君を殺さないよ」

その言葉に少年は驚くことなく言葉を発する。

——ナンデ？——

そう彼はいった。

「君を救いたいから」

ゆっくりと言葉を紡ぐ私に隊員たちは啞然とする。

「何言っているんですか執務官！！」

「こんなにやばい子は早々に殺すべきです！！」

そんな心許無い言葉に私は頭に血が上る。

「黙ってください」

そついうとまた言葉を紡ぐ。

「私は君を助けたい。それが理由じゃ…ダメかな？」

彼は笑顔を崩さず、また歩みを止めない。

——ダメダヨ、ボクハコロサレナキヤイケナインダ——

「そんなことはないよ」

言葉を慎重に選びながら私もまた彼に向って歩き出す。

——ボクハシナナキヤイケナインダ——

「なんで？」

——ボクハイツパイヒトヲコロシタカラ——

「殺したくて殺したんじゃないんでしょう？」

——ソレデモコロシタコトニカワリハナイヨ——

「じゃあ、私がそれを許してあげる」

お互いに歩み続けた結果、今私たちは向かい合っている。
あと一歩踏み込めば彼の体に触れることができるくらいに……。

——ユルシテクレルノ？——

「うん、私が許す。だから泣いてもいいんだよ？」

私は彼をやさしく包み込む。

「だから、一緒に行こう？」

そうして彼は静かに泣き始めた。

これが私と彼の出会い。

PL 出会い（後書き）

初めて二次創作に手を出してみました、いろいろ大変ですね。

今回はPLということで主人公の過去について書いてみましたが、なんか…こう…ひどくない？

グロくない？

ひどいですよ、これ。

主人公の過去に何があったか逆に気になります、おもに私が。

ということで、なのはの二次創作〜小さな少年と小さな勇気〜を始めてみましたが
至らぬ点など多々あると思いますが、長い目で見ていただいたら幸いです。

あ、感想とか改善してほしい点などはどしどし言ってください。
がんばります。

おそらく不定期で行進になるとと思いますが気長にお待ちくれたら嬉しいです。

では、次は1話にて。

最後まで読んでいただきありがとうございます。

第1話 彼の始まり（前書き）

祝1話！！

最近小説を書くのがつらく感じる時があります……。なぜでしょう…？

でも！！

これだけは最後まで書いてみせる！！

今回なんかグダグダする予感が……。

気にしないことにしましょう。

気にしたら負けでしょう…たぶん。

では、魔法少女リリカルなのはStrikers ～小さな少年の小さな勇気～

第1話 彼の始まり 始まります

第1話 彼の始まり

1話 彼の始まり

「ジュン、起きて」

「はぁい」

夢を見ていた……。

すごく懐かしい夢。

僕と母さんの出会いと始まりの事件。

荒んだ場所。

腐臭の匂いが漂うあの場所。

あのおいが嫌で……。

人を殺したという感触が嫌いで……。

自分をモルモットとしか見てないあの研究員たちが嫌で……。

そんな中僕は子供ながらに思った。

——死にたい——

そんな間違った考えから救ってくれた目の前の女性、フェイト・T・ハラオウンの力になりたくて……。

僕は陸士士官学校に入学した。

もちろんお金なんてなかった。だから、フェイトさんに当時土下座してまで頼もうとしていた。

しかし、フェイトさんは快諾して、さらに——

『私の養子にならない？』

——とまで言ってくれた。もちろん僕もこれを快諾した。
そして、士官学校を1年で首席卒業。

陸戦Bランクを取り、母さんの執務官補佐としてこれまで1年半務めてきた。

「ジユン？　どうかした？」

「いや…なんでもないよ、母さん」

「あんまり無茶したらダメだよ？」

「わかってるよ」

母さんの過保護っぷりは今に始まったことではないが、これではエリオさんやキャロさんも苦労するだろう。

「ジユン一等陸士、準備が整いました」

「ありがとうございます」

どうやら転送準備が終わったようだ。

「行こう、母さん」

「うん」

僕たちは1週間後から1年母さんの幼馴染である八神はやて二等陸佐が今度立ち上げる新設部隊「遺失物管理部・機動六課」

フォワード
FWは全員新人。

いや――

FWだけではない。

ロングアーチや整備士、デバイスマスターまでもが新人で構成されている。

そんな場所に僕が行ってもいいのか疑問だ。

「それではみなさん、しばらくのお別れですがしなない程度に頑張ってください」

「私たちは機動六課に行くけどみんなも元気だね？」

『ハイ！！！！』

そう言っ僕たちは部隊員の人たちに別れを告げた。

場所は変わって陸戦Bランク試験場。

「あ、フェイトちゃん、ジュンくん」

ヘリポートで待っていたはやて二佐がぼくたちに手を振る。
母さんは手を振り返し、近づいていく。

「お疲れ様です、八神二佐」

軽く敬礼をする。

「久しぶりやね、ジュンくん。あとはやてでいいで」

「そんなわけにはいきません。非公式の場ではそれでも構わないか

も知れませんが、ここは公式の場ですので」

「そんなこと言わなくてもいいんじゃないか？」

そう言ってヘリの中から出てきたパイロット。
確か機動六課でヘリのパイロットをする――

「ヴァイス陸曹ですね？」

「ああ、ジューンだったな」

「はい、ジューン・T・ハラウン一等陸士です」

「よろしくな」

そして、僕たちはヘリに乗り込んだ。

「この二人がはやてが見つけた子たちだね？」

「うん、二人ともなかなか伸びしろがある子や」

えっと、スバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士か。

階級僕より下じゃないか。
年齢上なのに……。

僕が異常なのか？

「うん、異常や」

「八神二佐、勝手に人の心読まないでください」

「異常じゃないわけないやろ？ 陸士士官学校を5歳で入学。1年後には首席卒業。その後フェイトちゃんの切り札として活躍。わずか7歳にして一等陸士」

「うん、ジュンは異常だね」

「異常っすね」

母さんだけは信じていたのに、あっさり肯定された…。泣きたい……。

「あ」

「どうしたんですか？」

「どうもサーチャーに流れ弾が当たったみたいなんよ」

どうせ、どちらかが無茶した結果だろう。

「なのはに任せよ」

そやね、とはやてが言って3人が見守る中、ランスター二士が出てくる。

全員が無茶、無謀と考えているだろう。でも僕は違う。

この2人は才能に満ち溢れている。

だから僕はこの2人が絶対合格すると確信している。

「それでは、僕は仕事がありますので」

「あれ？　なんか仕事あつたっけ？」

母さんが疑問に思うが僕はゆっくりと首を横に振る。

「高町教導官が考えていることを先に用意するだけです」

「????」

おそらく高町教導官はこう考えるだろう。

『実力や魔力値はBランクを超えているけど、危険行為により減点。しかし、このまま陸戦Cランクでいるのは危ないので、本局の先輩からいろいろ学ぶための推薦状を用意した。』

3、4日後には再試験が受けれるように手配しよう
『とまあこんな感じだろう。』

地上本部の顔見知り結構多いので頼めばやってくれるでしょう。

「では、お先に失礼します」

「あ、うん。お疲れ様…」

さて、高町教導官と僕の信頼できる先輩は……。

「いるのかな……？」

そう呟いて、ジュンはヘリから飛び降りた。

「フェイトちゃん、ジュンくん大丈夫なん？」

「うん、大丈夫。一応飛べるから」

そういう意味やないんやけど、と思うはやてであった。

所変わってとある一室。

「部隊名は『時空管理局本局・遺失物管理部・機動六課』!!」

「登録は陸士部隊。FW陣は陸が主軸やな」

八神はやては自分が部隊長を務める部隊のあらましをスバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士に説明していた。

そして、その時ジュンかというと――

「高町教導官」

「ん？ あ、ジュンくん!! 久し振りー!!」

「はい、お久しぶりです高町教導官」

ジュンは軽く敬礼をする。

そんなジュンに苦笑するのは。

「どうしたの？ なんか用事？」

「はい、高町教導官にこれを」

ジューンはなのはに封筒と中に入れる書類を渡す。

「なにこれ？」

「本局の先輩たちによる講習。その承認の書類です。必要かと思いまして勝手に用意させてもらいました」

「いいよ、ありがとう。助かったよ」

「では」

S i d e なのは

「では」

そう言って引き返していく。
あれ？

「フエイトちゃんのところにはいかないの？」

「まだ仕事があるものですから」

ジューンくんはそのまま歩いて行った。
執務官補佐って忙しいのかな？

S i d e O u t

「ヤバいな、遅れてる」

あれから1週間の時間がたち、機動六課設立のあいさつの時間にジユンは六課隊舎内を走っている。

ジユンは昨日地上本部の会議のセッティングに思ったより時間がとられ、気がついたら朝日が昇っていた。

八神部隊長の挨拶まで多少時間があつたので仮眠をとっていたら……

「ごらんの有様さ……。ん？」

ジユンが隊舎を走っている途中、なのはが視界に入りなのはの方向に向きをかえ再び走る。

「高町教導官」

「あ、ジユンくん。遅刻だよ」

「申し訳ありません……」

ジユンはもう魔王モードにならないことを祈り、謝る。

「あとで、はやてちゃんに挨拶するんだよ？」

「はい……」

「じゃあ行こうか」

このとき、ジユンは疑問を抱いた。

この後のジユンの予定は、会議に出席し書類をまとめ、シャワーを

浴びて寝ることだった。

やっていることは少ないが実はこれはすごく大変で、会議に出席した時には一字一句間違ふことなくそれぞれ先方の言ったことなど記録しなければならぬ。

これはジュンが勝手にやっていることだが、ごく稀に会議で言っていた内容と違うといちやもんをつける輩がいるからだ。

これの対処に困っていた母さんに何かいいアイデアはないか、と聞かれてこれを始めた。

それでも、長くやっているといくとキーをたたくスピードは上がるがそればかりにかまけている暇は執務官補佐にはない。

時には執務官の意見の穴を突いた輩の穴を突き返したりとやることは山づみだ。

だから、母さんの補佐は結構気疲れするのだ。

しかもそれを母さんに気づかれないうちに振る舞わなければならぬ。

そんな仕事があるのに高町教導官は”じゃあ行こうか”といった。

4人のFWメンバーを後ろにひきつれて。

ここまでくればもう明らかだ。

ようは”訓練行こうよ”ということだろう。

しかも教導官は高町なのは。

これはもう必然的に『ジュンくんの実力が知りたいから模擬選やろうか?』という展開が目に見えている……。

「いや、でもフェイト執務官の許可が――」

取れてませんと続けようとしたが――

「フェイトちゃんの許可なら取ってるよ?」

ジュンの逃げ道は早々に崩れ落ちた。

「わかりました……」

しょうがないのでなのは後についていくジュン。
哀れジュン……。

訓練場につき、FWとの自己紹介が終わっていないので自己紹介をし
ろとの魔——もとい、高町教導官がおっしゃった。

「なんか魔王って聞こえた気が……」

「気のせいでしょう？」

「じゃあ、自己紹介しようか。スバルから」

「はい！！ スバル・ナカジマ二等陸士です！！」

「スバル、何階級下の子に敬語使ってるのよ。ティアナ・ランスタ
ー二等陸士よ。よろしくね」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。こっちはフリード」

「キュクル」

「エリオ・モンディアル三等陸士。よろしく」

じゃあ、次はジュンくんだね、と促させるまま順は自己紹介をした。

「えっと、ジュン・T・ハラウン執務官補佐です。階級は一等陸

士です」

最後によりしくお願いしますと付け加え、きれいな敬礼をする。

「「「「ええゝ!!!」」」」

「一等陸士って年齢は!？」

ティアナがすぐに質問する。

「7才ですね」

「テストロッサ・ハラウンっていうのは!？」

「フェイト・T・ハラウンは僕の母さんです」

「じゃあ、ジュン一等陸士がフェイトさんの切り札って言われている!？」

「世間一般ではそう言われてるそうですね」

みんなもう黙りこくる。

すると、ティアナがいち早く我に返り叫ぶ。

「失礼しました、ジュン一等陸士!！」

きれいな敬礼を見せる。

そのあとに続いてFW全員が失礼しました、と言って同じく敬礼をする。

ジュンはおろおろしてどうしようか迷っている様子。

それを見て、後ろで腹を抱えて笑うのは。

「いや、あのですね…僕のことは呼び捨てでいいですよ」

「はあ…しかし」

それでもティアナは下がらない。

「年下に敬語って嫌じゃないですか？」

「いえ、そんなことは…！」

ジューンはやれやれと言って言葉を紡ぐ。

「僕はさ、尊敬すべきは”階級”ではなく”年齢”だと思うんです」

「”年齢”ですか…？」

「うん。”階級”は各々（おのおの）が上げた戦績を示すけど、”年齢”は各々が歩んできた人生を示します。そして、さっき言ったのを詳しく言えば、尊敬すべきは”人生”であって”戦績”ではない。確かに軍人として何より大切なのは軍規と階級、そして命令です。だけど、人として大事なものは敬愛するということとは思いませんか？」

「は、はあ……」

「どんな人でもそれぞれに歩んできた人生があります。人によっては悲しい過去や苦しいことだってあったかもしれませぬ。でも、その人は今を生きているんです。自分よりはるか多い年月を」

F W陣はもちろん、さっきまで笑っていたのはさえもすっかり聞いている。

それほどにジュンの言葉は重く感じた。

この場の全員が思うことだろう。

彼に一体何があったのかと――

一体なぜ彼はここまで考えたのだろう――

彼はここまで追い込まれていた時期があったのだろうか――

たった7歳の彼に一体何が――と。

「しかし、その人の階級は三等陸士です。つらい過去を持ったにもかかわらず。そんな人を顎で使う人もいるかもしれない。ですが、僕はそんな人になりたくはない。そう思ったからこそ僕はこの持論を掲げているのです」

「ですので、僕のことはどうか”ジュン”と読んでください」

「……」

「ダメですか？」

「……」

ジュンは自分の思いをすべて話した。それでも呼んでくれないのかと思うと何のために話したのか分からなくなる。しかし、ティアナたちF W陣はなにも返せない。

「……ダメならだめで結構ですよ？ 自分の持論を他人に押し付けることはしませんから」

ジュンは優しく言う。

別に彼女たちが悪いわけではない。
でも、自分が悪いわけでもない。

それでも、自分の考えが否定されたようで悔しくなる。

「高町教導官、訓練を始めましょう」

「あ、う——」

「ジュン——」

なのはの返事に割って入るような感じでスバルがジュンの名前をつぶやく。

その言葉にジュンは目を見開いた。

「ジュン——」

「ジュンさん——」

「ジュン」

スバルに続いてティアナ、キャロ、エリオの順でジュンの名前を呼んで行く。

そして、ジュンは——

「はいっ！——」

満面の笑みで返事をした。

それが機動六課での彼の始まり——

第1話 彼の始まり（後書き）

ということ、第1話 彼の始まり どうでしたか？

なんかグダグダなような、そうでないような…。

そんな感じが否めませんね。

それにしても、いやゝ主人公の身にいたい何があったんでしょ
うね？

おもにフェイトに出会う前。

作者のはずの私が一番気になっていると思うのですが……。

何と行き当たりばったりな小説！！

落ちが決まっていけないのに書くとは！！

愚かなり私！！

まあでもそんなものでしょ？

ああにしてもジュンくんの変わり具合が半端ない…。

もともとですね、ジュンくんは”仕事ができるが人見知り”なかわ
いい男の”娘”にする予定だったんですよ！？

それなのに……それなのに！！

いつの間にか外見に見合わない精神年齢の少年に……！！

ああゝ本当のジュンくん帰ってきてゝ！！

まあそんなことはさておき、どうです、1話。

なかなかいで——きではないですね、ハイ。

楽しんでくれているなら幸いです、そうでない方は読むのをやめることをお勧めします。

もうしばらくはこんな感じで進むんで、見苦しいと思います。

それでもいいという方はぜひ見てあげてください。

これはもう趣味に近いので。

では今回はこの辺で。

次は2話ですね。

できるだけ早く仕上げるので遅くてもものぞきに來てくれたらうれしいです。

第2話 模擬戦（前書き）

FWメンバーとの自己紹介も終わってこれから訓練！！という時に
なのはから模擬戦の話が持ち上がる。

それがある程度察知していた彼——ジュン・T・ハラウンは諦め
て模擬戦をやることに……。

ジュンは一体どうなるのか…？

それでは——

魔法少女リリカルなのは Strikers 小さな少年の小さな
勇氣

第2話 模擬戦 始まります。

私は戦闘シーンを描くのが下手なので、見てられないと思う方は
見ないほうがいいと思います。

第2話 模擬戦

第2話 模擬戦

Side ジュン

「ジュンくん、模擬戦しようか」

自己紹介が終わって高町教導官が模擬戦の準備をしながら言う。

「了解しました……」

僕はもう半ばやけくそ気味に高町教導官に従った。

「デバイスのこと聞いていい？」

僕はいいですよ、と答えて模擬戦の場所の地理を確認する。

「ジュンくんはミッド式？ それともベルカ？」

「ミッドです」

「デバイスの形状は？」

「ナイフです」

高町教導官はなるほど、と考えこむ。

相手が高町教導官なら僕の最も苦手とする距離^{レンジ}。

おそらく普通にやったら負けるだろう。

秘策でもない限りは…。

「相手は私でいい?」

「僕は構いませんが…」

僕がそう言うはただ一つ。

ここの部隊長が八神二佐なら当然守護騎士もいるわけで…。

ということは、シグナム二尉がいるということ。

なぜシグナム二尉が嫌かって?

そんなあの人が戦闘マニア（バトルジャンキー）だからだ。

僕自身は戦ったことはないけど、フェイト執務官は結構戦っている。フェイト執務官との戦闘を見ていると、あの人がニヤリと笑うのが見える。

そんな人が僕の模擬戦相手になったらと思うと……体が震えるよ。

「待て、高町。武器が刃物なら私が妥当だろう?」

ほら来たよ、言ってるそばから。

「私は別にいいけど……。フェイトちゃんに『シグナムとは戦わせたらダメ』って言われてて……」

「むう……」

「だから、ごめんね? シグナムさん」

「私とて新人相手に手加減ぐらいできる!!」

あれ？

シグナム二尉何か勘違いしてないか？

「ああ、違うの。フェイトちゃんがね『シグナムは初見でジュンには勝てないから』って」

「私が新人に負けるといいたいのか、テストロッサは…」

「よかるう!! 私か新人に劣っていないことを証明してやるう!!
! 来い、小僧!!」

えー…。

結局模擬戦の相手はシグナム二尉に…。

泣いていい…？

S I d e O u t

現在シグナムとジュンは模擬戦のため、向かい合ってバリアジャケットを展開している。

ジュンのバリアジャケットは、基本的にはフェイトを参考にするためスカートがズボンになったこと以外はさして変わらない。軍服調の黒いバリアジャケット。

ついでに、マントはジュンが邪魔と言ったのでない。

「では、始めようか」

シグナムの言葉にジュンは頷く。

『じゃあ、始め！！』

なのはの合図とともにまっすぐジュンに向かうシグナム。ジュンはそれを見て、とっさに後ろに飛び退く。

「甘い！！」

が、シグナムはジュンに向かってなおも走る。そして、力いっぱいレヴァンティンを振るう。

「剣をよけたくば後ろに下がるなんて愚行はよすんだな！！」

「後ろに下がることは愚行ではありませんよ、シグナム二尉」

その言葉と共にジュンはゆっくりと姿を消してゆく。

「っ！？」

シグナムはジュンが消えた位置を空振りする。すぐさま後ろに跳びジュンがいた位置から距離をとる。

（なんだ、今は…？ 幻術？ いや、ジュンの稀少技能^{レアスキル}か？）

「そうですよ、シグナム二尉。僕の稀少技能^{レアスキル}：名を『インビジブル』
と言います。その名の通り、僕の姿を消す能力です」

「なるほどな……」

シグナムはこれは厄介だ、と考える。

姿を消すだけならば、達人は気配から位置を探ることができる。だが、もし、ジュンの『インビジブル』に気配も消す能力までもが付与されているならば、相手に悟られず相手を無力化できる。危険極まりないレアスキル。

しかし、レアスキルにも弱点が存在するものもある。

何かを代償にそのスキルを使っている可能性は十分にある。

（一体何を払っているのか…それを見極めれば私の勝ちだ！！）

「考えてる暇はありませんよ」

「——何！？」

不意に、声が後ろからしたので、振り返れば姿を現したジュンがナイフを振るっていた。

とっさにレヴァンティンをかざし、それを防ぐとジュンは再び消えていった。

「なんと厄介な……」

戦闘は視覚で行っている部分が多いため、多くの戦士は見えない攻撃に怯え、やられる。

今のシグナムのように簡単に不覚を取る。

「次行きますよ！！」

その声と同時に後ろからナイフが一本投擲なげされる。シグナムは普通にレヴァンティンで上に弾く。

「取った！！」

言葉と同時に姿を現すジュン。

ジュンはシグナムの上をとった。

上にはじかれたナイフをジュンはキャッチ。

そのままシグナムに向かって一直線に落ちる。

「ちっ……！！」

再びレヴァンティンをかざし、それを避ける。

ジュンはレヴァンティンを踏み台にしてシグナムのはるか後方に下がる。

そして、『インビジブル』を発動。

シグナムの前から姿を消す。

S i d e シグナム

ふむ。ジュンの戦い方は理解した。

相手の目の前から姿を消し、不意を突く。

戦術の基礎を生かした戦い方。

だが、その戦い方には弱点がある。

ジュンのレアスキル『インビジブル』は攻撃前には必ず解ける。

そういう制約のもとで発動できるのか、または消える時間に制限があるのかは疑問だが攻撃の前に溶けていることが今は重要。

こいつは伸びる。

ジュンは頭がいい。攻撃も7歳にしては鋭い。

作戦もいい。剣筋つといていいかは疑問だが、それも結構高いランクだ。

何より私はジュンの面構えが好きだ。

一流の剣士の顔をしている。

凛々しく、諦めず、それでいて強い。

だからこそ、ここで私が敗北の味を味あわせなければ奴はいつか落ちる。

高町のように……。

私は不器用だからな。

こんなことでしか貴様を守れん。

だが、私は不器用なりにこいつを守りたい。そう思えた。

主はやて、テストロッサ……。すまない。

私はこいつのためにこいつを斬る！！

「レヴァンティン！！」

ロードカートリッジ

「紫電——」

「——閃——！！」

S i d e O u t

シグナムがカートリッジを排出する。

それと同時にジュンは真正面からシグナムに突撃する。

「紫電——」

レヴァンティンに炎熱効果が付与される。
それを見てもスピードは緩めない。
ナイフを振るった一瞬、ジュンの体が現れる。

「——閃!——」

レヴァンティンが振るわれ、ジュンの体に直撃。
が、しかし——

「な!?!」

ジュンの体は一瞬で消えさる。
ティアナのフェイクシルエットのよう……。
そして、ジュンは後ろからシグナムに手刀を繰り出す。

「がつ!——」

そのまま、シグナムは崩れ落ちた。

模擬戦4時間後。

「——っ!—— ころは……」

「医務室ですよ」

シグナムは模擬戦で落ちてから4時間きっかりで起きた。

「シャマル…そうか、負けたのか…」

「シャマル、シグナム起きた？」

シグナムが起きてすぐにはやてが入ってくる。

驚いたが数時間前に帰ってきたのだろーと思ひ、シグナムは申し訳なさそうに頭を下げた。

「すみません。負けてしまいました」

「それはええよ。それより、ジュンくんのことについて分かったところある？」

ある程度予測していたのか、シグナムはすぐに答えだした。

「あのレアスキルは危険です。どこまで何を消せるのか、それが初見ではわかりません。さらに奴は頭が切れる。どのような状況から相手の弱点や隙を見つけるかわかりませんし、それを相手に悟らせることもありません。あの能力は異常です」

はやてはふむ、と考え込んで、体長陣とジュンを部隊長室に集まるように念話を飛ばした。

5分後。

全員が集合し、はやてが率直に聞きに行く。

「ジュンくん、あの『インビジブル』とやらの事詳しく説明してくれへんか？」

「『インビジブル』？ そんなスキルないですよ、僕は」

そこにいた全員がえ、っという顔をする。
ちなみに、フェイトを除く。

S i d e ジュン

みんな何を言ってるんだろう？

「じゃあ、あれは一体……？」

シグナム二尉が聞いてくる。

あれ、言ってなかったっけ？

でも八神二佐が知らないのはおかしい。

「八神二佐、書類しつかり目を通しましたか？」

「え、いや。まだやけど……」

「では、この際です。僕的能力を話しましょう」

あんまり気が進まないけど。

「僕が使った『インビジブル』なる能力。そんなの存在しません」

「……は……？」

「僕が使えのはフェイト執務官が使える『ソニックムーブ』と『幻術』だけです」

「え、でも…模擬戦してるときモニター越しに見たけどそんな様子はなかったし私たちにも消えたように見えてたよ？」

高町教導官の質問にみんながうなずく。

これ僕の切り札なんだけど…。

「僕の幻術は少し強すぎるみたいで、機械越しにでも少しだけ効くんです」

まあ、今はこの認識でいいか。
面倒だし。

「では、説明しますね。僕は射撃魔法や一撃必殺と言えるレベルの魔法がないので、相手と対峙した時に決め手に欠けます。それを単純に幻術で補っているだけです」

「補うってどうやってなん？」

まあそこだけ聞いたらよくわかりませんよね。

「まずは模擬戦のことについて解説します。僕は長期戦には向きませんから模擬戦は短期決戦で決めなければなりません。そこで、まず相手であるシグナム二尉に幻術をかけます。僕が”消える”という内容です。次に言葉によって相手の思考を制限します」

「思考の制限？」

ええ、と高町教導官に返事する。

「シグナム二尉はおそらくはじめに”幻術”という可能性を考え、次に”レアスキル”の可能性を考えたはずです」

シグナム二尉が自分の考えが読まれていたのが悔しいのか、むつとした表情で返す。

「ああ、そうだ」

「そこで僕は”消える”ことが”レアスキル”かのように話します。そのあとシグナム二尉は完全に”レアスキル”と判断し、弱点を探そうとします」

実際シグナム二尉は弱点を探すために防戦に徹していた。

「次に弱点をわざと露見させます。今回の場合は”攻撃時に姿を現す”というものでした。そして、シグナム二尉はそれを本格的に弱点と判断。それに合わせて必殺の一撃を決めれば終わるとみます」

確かにあの時、シグナム二尉は紫電一閃のためにカートリッジを排出した。

あれが決まれば負けてましたが。

「シグナム二尉が弱点と判断した後になっすぐに突っ込みます。そして、姿が現れればそれを”本物”と思い、紫電一閃を放つでしょう。そう予測しました。見事にシグナム二尉ははまってくれました。そのあとは僕がシグナム二尉の後ろに回り、昏倒する一撃を放つだけです」

「シグナム二尉の反省点は”レアスキル”だと信じてしまったことと、”撃時に姿を現す”ことを弱点と判断するには早計だったこと

ですね」

以上です、と言って話を終える。

「質問は？」

皆さん何も言っでこないの、失礼しますと言って部隊長室を出ていく。

あんまり話したくなかったんだけどな…。

幻術は僕の切り札だし、口がうまいのも一応幻術が切り札足りえる要因の一つだし。

S i d e O u t

「いや…危険すぎるやろ…彼」

守護騎士一同が頷き同意する。

「ジュンがね——ジュンがなんて言われているのか知ってる？」

フェイトが言っで全員で考える、がやがて全員が首を振る。

「”絶対強者”らしいよ」

それを聞いてその場にいた全員が息をのむ。

相手が自分の情報を持ってない限り負けることはほぼありえない。

しかし、ジュンは数限りない変化をピックアップし、その中から最も有効な手段を考える力があり、それを実行する度胸もある。

さらに、戦場では彼は常に冷静。
指揮官の才能もあり、戦闘では単独でSランク魔導師を抑えるほどの力。

これを見た武装隊の魔導師がつぶやいたそうだ。

——彼こそ絶対強者と呼ぶにふさわしい——

と。その次の日からジューンは”絶対強者”と言われついでに”フェイト執務官の切り札”と呼ばれたした。

数少ない魔法を駆使して——
幻術を巧みに操り——
相手に悟られずに背後をとる。
この戦い方はまさに——

「——暗殺者、やね」

第2話 模擬戦（後書き）

さて、第2話ということですが、どうでしたか？

あ、言いたいことはわかります。

戦闘シーン書くの下手すぎと言いたいんですよね？

そんなことは自分でもわかっていきますとも……。

なぜ私は戦闘シーンをうまく書けないのか疑問です。

一種のコンプレックスといってもいいかもしれません。

PLは投稿していない作品でも毎回シリアスに書けるんですね？

でも力が入るのって最初と最後だけなんですよね…私は。

意外とあっさり負けましたね、シグナムさん。

打ち合ってすらいませんし。

もはや相手がシグナムの意味がありませんね。

まあ、彼女も生粋の”バトルジャンキー戦闘狂”ですから喜んでくれているでしょう。

では今回はこの辺で、次回、おそらく一気に飛ばしてファーストアラート辺りまで行くと思われます。

それでは、最後まで読んでいただきありがとうございました。

第3話 ファーストアラート 前編（前書き）

赤ボールペンさん感想ありがとうございます。
これからも頑張ります！！

さて、これで3話ですね。

不定期で更新と言ってましたが、なかなか進めるの早いと思ってる今日この頃です。

前回の模擬戦ではジュンくんの思慮の深さを垣間見ました。
7歳のくせにずいぶん考えるんですね、あの子。

模擬戦が終わって、自分の切り札を早くも公開したジュン。

そんな彼の初陣は一体どういうものになるのか…。

では、魔法少女リリカルなのは Strikers 小さな少年
の小さな勇気！

第3話 ファーストアラート 前編 始まります

第3話 ファーストアラート 前編

第3話 ファーストアラート 前編

S I d e ジュン

模擬戦のあと隊長陣に僕的能力説明があつた。

すぐに終わったからいいが、あまり人に話したくない内容だ。

僕の切り札は幻術だけ。

ランスター陸士みたいに射撃ができるわけでもないし、モンディアル陸士みたいな一撃必殺を持っているわけでもない。ましてや、ルシエ陸士のように完全なフルバックでもない。

ナカジマ陸士のように前線で攻撃を耐え切る防御力も力もない。

「結局僕はあいまいなだけだ……」

部屋に帰ろうとしたが部屋がどこにあるかもわからずモンディアル陸士に念話を飛ばした。

《モンディアル陸士》

《なに、ジュン》

《僕とモンディアル陸士は同じ部屋でしょうか？》

《え、違うよ？》

違うのか……。

なら、母さんに聞こう。

《フェイト執務官、僕の部屋はどこでしょう？》

《えっと、待ってて。今行くから一緒に行こう？》

《わかりました》

待つこと10分。

「お待たせ、行こうか」

「はい」

それから歩くこと数分。

女性寮についた。

まあ、僕はまだ7歳だし、問題はないが……。

「ここだよ」

「母さん、ここには『テストロッサ・ハラウン＆高町なのは』って書いてますけど？」

「ジュンもテストロッサ・ハラウンでしょ？」

「高町教導官は了承しているのですか？」

「うん、してるよ」

S i d e O u t

S i d eなのは

部屋の外で声がある。

「高町教導官は了承してるのですか？」

「うん、してるよ」

ああ。何となくわかった。

フェイトちゃんジュンくんと言わなかったんだ。
私たちと同室のこと。

「とりあえず入ろ？」

そう言つてフェイトちゃんはジュンくんを中に入れる。

「なのはさん…いいんですか？ 僕と一緒に」

さつき業務時間が過ぎたのでいつも通り話してくれるジュンくん。

「うん、いいよ」

「僕は遠慮したいんですが…」

フェイトちゃんがええ！！と声を上げる。

フェイトちゃん…その声まぬけ過ぎるよ……。

「ジュンが一緒じゃないと眠れないよ!!」

「どうして？」

私が疑問に思ったことを口にする、フェイトちゃんはものすごい勢いで近寄ってくる。

「なのはは知らないと思うけどジュンの抱き心地は最高なんだから!! 一回ジュンを抱いてからもうジュンなしでは不眠症になるんだよ!!」

「そ、そんなに……？」

恐る恐る聞くとフェイトちゃんは力強く頷く。

「なんならなのはも今日抱いて寝るといいよ!! ベットは3人用の一つだから私たちの間にジュンを置けば2人で抱いて寝れるし!!」

「う、うん……」

そうして、ジュンくんを間において眠りについた。

ジュンくんを抱いて寝た次の日から私もジュンくんなしでは眠れなくなりました…。

S i d e O u t

ジュンの模擬戦から数週間がたった。

ジュンは模擬戦の結果からあの戦い方が定着しているため、なのは
は何も教えられなかった。

基礎訓練で基礎向上を図ったが、ジュンの基礎は驚くほどに洗礼さ
れていた。

体力は六課の誰よりも高く、指揮官としての能力も高い。
自分の役割をしっかりと理解しているため、無理することもまったく
ない。

そのため、ジュンには当初”ライトニング05”として入隊させる
つもりがFW全体の指揮をする”ファントム01”となっている。

基本的にはティアナにすべて任せるが、間違えたときや最善の策の
一歩手前の場合のみに口を出す。

ティアナははじめ納得いかないようだったが、ジュンのほうが経験
が多いためしぶしぶ承諾。

そして、訓練でスバル自作デバイスのローラーがオーバーヒート。
そのまま実戦用デバイスに切り替えるためシャーリーのところに来
ていた。

S i d e ジュン

「あ、これジュンくんのデバイスね」

そういつてフィニーノ陸士は僕のデバイスの待機状態（スボンにぶ
ら下げているチェーン）のものを渡してきた。

「これは？」

「ジュンくんのデバイスにAIをつけたのと、フェイトさんからの指示でナイフを2本、小太刀を一本追加しました」

小太刀？

なんだそれ？

太刀ってなんだ？

小ってくらいだから太刀っていうのの小さい奴だろ？

「まあ、リミッターのことは頭の端にでも置いておくといいよ。今はそれよりデバイスのこと」

おっと、高町教導官来ていたのか。

話聞いとかなきゃ”お話”されてしまう。

魔王の”お話”は有名だから…。

それに僕は母さんから実体験を聞いたし……。

思い出しただけで震えが止まらない…。

「ジュンくん、寒いのか？」

「いえ……大丈夫です」

「そ？ 寒いなら言ってね、風邪だと大変だから」

はい、と短く返事をして高町教導官は話を続ける。

すると、第一級警戒態勢のアラート音が鳴り響く。

S i d e O u t

S i d eなのは

第一級警戒態勢のアラートが鳴り、グリフェスくんにつなぐ。

「グリフェスくん!!」

『ハイ!!』

『なのは隊長、フェイト隊長、こちらはやて!!』

「状況は!？」

私は早く状況が知りたくてはやてちゃんに聞く。

が、その答えははやてちゃんからではなく、もっと近くから聞こえた。

「状況は把握しました」

『え?』

それはジュンくんだった。

ジュンくんはいつの間にかシャリーリーの席を奪いコンソールを叩いていた。

「グランセニック陸曹はヘリの離陸準備を!! フェイト隊長の市街地個人飛行許可承認!! FWメンバーヘリへ早く!! ロングアーチ、サーチャーで空の警戒を!!」

ジュンくんはこの場でできる限りのことを全員へ指示した。
全員が一瞬ポカンとしていたが、すぐに返事をして配置につく。

「高町隊長も早くヘリへ。状況はそこで説明します」

「あ、うん」

ということとでヘリに搭乗しました。

「では説明します。現在、ガジェットドローン？型はリニアレールで護送中だったレリックを発見。これを襲撃しています。おそらくガジェット？型が空から来るだろうと思われます。？型は隊長のお二人に任せます。リイン曹長は現場管制をお願いします。？型の大型タイプはできるだけ戦闘しないようにして、僕かリイン曹長に任せてください。尚、リイン曹長にはリニアレールの停止も担当してもらいます。何か質問は？」

はい、ありません。

というか、あるわけありません。

ご丁寧にどうもありがとうございます。

というか、こんなにジュンくんってスペック高かったんだ……。
フェイトちゃんが手放したくない気持ちもわかるよ…。

『なのはさん、ジュンくん、ガジェット？型が来ました！！』

……。

本当に着ちゃったよ…。

「では、高町隊長、フェイト隊長空は任せます」

「うん、わかったよ」

「じゃあ、ちよつと出てくるけど、みんなもがんばってズバツとやっつけちゃおー!」

「「ハイ!!」」

うん、いい返事。

この分ならみんな大丈夫かな。

「ハイ!!」

キャラはちよつと緊張してるのかな？

隊長の私が励まさないや。

「キャラ、大丈夫。そんなに緊張しなくても。離れてても通信でつながってる。ピンチの時は助け合えるし、キャラの魔法はみんなを守ってあげられる優しくて、強い力なんだからね?」

キャラの頬をやさしく包みこんであげる。

大丈夫だよ、キャラ。

s t a n d b y l a d y

「レイジングハート、セエットアップ!!」

S I d e O u t

S i d e ジュン

高町隊長nフェイト隊長は空へ向かった。

ルシエ陸士が緊張していることは勿論わかっていた。

でも、僕が何か言ったところで何も変わらない。

それも理解していた。

だから、みんなには飴になってもらって、僕が鞭になる。

「ルシエ陸士」

「はい」

「緊張するのは悪くないです。それは仕方のないことですから。でも、現場ではミスしないようにお願いします。今回の事件は幸い僕や隊長たち、ライン曹長が近くにいるのでフォローしますが、単独での任務は一つのミスが命取りになるのです。そこをしっかりと理解し、落ち着いて。けれど素早く判断するのです」

「ハイ……」

「ジュン、ちょっと言いすぎじゃない？」

ナカジマ陸士がそう言うてくるが……

「ナカジマ陸士、現場では基本的に上司の言うことには絶対です。私は一応FWの直接の上司ということになっていますのであしからず」

ナカジマ陸士が反論してこない。

それでもランスター陸士はこつちを睨んでいますが…。

誰かが飴を与えるなら誰かだ鞭を…。

でも、僕では鞭は与えられるけど飴は与えられない。

なら与えられるほうをあげるまで。

嫌われ役はなれている。

「さて、隊長さんたちが空を抑えてくれるのおかげで安全無事に効果ポイントへ到着だ」

「では、僕から行きます」

「ファントム01 ジュン・T・ハラウン。行きます」

そう告げ、僕はヘリから飛び降りた。

第3話 ファーストアラート 前編（後書き）

.....。

結局戦わないのかよ!!

書いていた私も思いましたよ…。

にしても、ジュンくんは優しいですね。

嫌われ役を買って出るとか私にはできません。

彼は六課に来る前にもこんなことをしてたんですかねえ…。

まあ、そんなことはどうでもいいんですよ。

3話どうでしたか？

私的にはやっとファーストアラートかって感じですけど。

私的には早くホテルアグスタを書きたいです。

ああゝまだまだ書きたいところがいっぱいある…。

でも、とりあえず当面の目標はアグスタです。

今回はこの辺で。

次は4話ですね。

タイトルなんて決まってますよ。

ファーストアラート 後編に決まってるじゃないですか。
では次は4話にて…。

第4話 ファーストアラート 後編（前書き）

海翔「投稿遅れて申し訳ありませんでしたー！！」

ジュン「なにかあつたんですか？」

海翔「いやね、やる気が出なくて…」

フェイト「そんなことでジュンの活躍の場面…書かなかつたんですか？」

海翔「申し訳ありません！！ だからバルディッシュ構えないで！？」

フェイト「トライデント……」

海翔「待つて！？ そんなの撃たれたら私死んじゃう！？」

フェイト「スマツシャー！！」

海翔「ギヤアアアアアア！！！！！！」

ジュン「フェイト執務官」

フェイト「何、ジュン」

ジュン「殺人未遂で逮捕します」

フェイト「え！？ ちょっと待つて！！ ジュン、ジュンってば

！？」

ジュン「ややこしいのもいなくなりましたし、では
魔法少女リリカルなのは S t r i k e r S ｝小さな少年の小さ
な勇気」

第4話 ファーストアラート 後編
始まります……」

第4話 ファーストアラート 後編

第4話 ファーストアラート 後編

S i d e ジュン

「アサシン…セットアップ」

s t a n d b y l a d y s e t u p

僕の体を光が包み、バリアジャケットが展開される。

バリアジャケットは以前のままだが、ナイフのある位置が若干違っている。

僕はいつもは素手で戦っているため、ナイフは右足についているホルスターに入っている。

しかし、今回は左胸部（厳密に言えば左腕の脇近く）に一本と、右足のホルスターにある。

右足のホルスターはいつもより少しだけ高い位置にある。

「まあ悪くはない、か」

頭、はじめまして

「ああ、はじめまして」

頭のために新しいものが追加されてます

「新しいもの？」

ハイ。自分が頭の身体能力を上げる機能です

「え？ でも……」

自分でも言うのもなんだが僕にはスピードを上げる魔法以外はすべて使用皆無に近い。

母さんから教わった”ソニックムーブ”

これ以外は全く使えない。

なのに、身体能力を上げる”機能”がアサシンにはあるという。あ。そうか…。

「魔法ではないんだね？」

お察しのとおりです。自分が勝手に頭のパワーとか反射神経を上げる機能なんです

「じゃあ、お願いしようかな」

御意に

しかし、最近は本当に便利なもんだ。

S i d e O u t

S i d e ティアナ

「ちょっとジユン言い過ぎだったね」

スバルがさっきのジユンの言葉を聞いてつぶやくように言った。
確かに、さっきのジユンは言い過ぎだと思う。

おかげでキャラが唇をかみしめている。

ただあのジユンの言葉は私にも刺さっている。

つまりジユンは彼らライトにングに”この程度の任務こなせないなら邪魔だ”と私にはそう聞こえた。

ジユン・Ｔ・ハラオウン一等陸士。

フェイトさんの補佐官で頼れる部下、そして——家族。

たった7歳で陸戦Ｂをとるほどの実力者。

さらに初見でのみオーバースを圧倒するほどの力と技量——レ
アスキル。

スフィアの威力も一級品。

スピードはまさにフェイトさんそのもの。

陸士部隊所属でありながら空戦もこなせるその応用力。

どの士官をも上回る体力と頭脳。

これが書類上のジユン・Ｔ・ハラオウン。

どこをどう見ても天才型。

凡人の私にはかないっこない。

でも、証明するんだ——いや……しなきゃいけない。

ランスターの弾丸はどんなものも貫けるって。

「さて、隊長たちが空を抑えてくれてるおかげで安全無事に降下ポ

イントまで到着だ」

そんなこと考えてる暇はないか。
今はこの任務に集中しなきゃ！！

「スターズ03 スバル・ナカジマ」

「スターズ04 ティアナ・ランスター」

「「行きます！！」」

S i d e O u t

スターズFとライトニングFがヘリから飛び降り、戦闘が始まる。
ジュンはFWの全体指揮のためライトニングよりのところに立っている。

『ジュンくん、ちょっといいか？』

そんなジュンにはやてから通信が入る。

「なんでしょう？。」

『なんでガジェットに？型と？型があること知ってたんや？』

ジュンはこの質問の意図を瞬時に考える。
執務官補佐の役職から来ているかは不明だが、上官に変な質問をされた時にはその意図を考えるのが普通になっている。

「簡単ですよ」

ジューンはそう言うてはやての質問に答える。
自信を持って、何もやましいことはしていないというように…。

「僕が制作者なら？型のみは絶対にしません。製作者の意図はいまだ不明ですが”装甲が硬い”ものや”飛行型”あるいは”攻撃特化型”など色々な種類を作り、そのデータを収集します」

『空の警戒はその可能性を考慮して、か？』

「はい。飛行型が生産されている可能性は十分に高かったですからそれを仮定して飛行型を？型、装甲が硬いまたはそれに準じものを？型としたにすぎません」

『そうか…。ならいいよ』

所変わって機動六課隊舎。

そう告げて通信を切る。

はやてもジューンの行動は気になったようだ。

ジューンははやてですらさっき知ったばかりの情報をすでに持っていたのだ。

「こわいな…あの子」

ロングアーチでつぶやくはやて。

ジュンの情報収集能力は異常に高い。

フェイトからもあらかじめそのことは聞いていただろうが思った以上にジュンの能力がたかったのだ。

おそらくジュンは管理局でも高い位置の情報収集能力だろう。

「フェイトちゃんの子供やなかったら…疑ってもうたかもな」

またも変わってリニアレール。

今リニアレールではエリオたち、ライトニングFが新型”？型”とエンカウントした。

？型はジュンの予測通り装甲が固いやつだった。

それが故、エリオの斬撃や突き、フリードのフレアも効果はなかった。

エリオはスピーディな戦いを主体とし、キャラはフルバックでの援護が主体。

そんな二人に？型の装甲抜くすべはなかった。

『ライトニングF、エンカウント。新型です！！』

ロングアーチの声が全員に聞こえる。

「フリード、ブラストフレア！！」

先手を切ったのはキャラとフリード。

キャラはフリードに攻撃の指示を出し、エリオは退避。

「ファイア！！」

フリードの口から炎が放たれ、新型へと飛ぶ。

しかし、新型の腕のようなものにはじき返され右の壁に当たる。

「はあああ！！！」

間をおかずにエリオがストラーダの切っ先に電気を付与させ、突っ込む。

「硬い！？」

だが、ストラーダの刃もフリードの炎も通じなかった。

そして、？型はAMFを広域展開。

ストラーダに付与されていた電気、キャロの魔法陣もかき消される。

「AMF！？」

「こんなに遠くまで！？」

なれたと思っていたAMF戦。

しかし、？型のAMFの強力さと効果範囲に驚く2人。

？型の中央が赤く光り出す。

それに気づいたエリオは？型の上を飛ぶ。

着地と同時に？型は反転。

単発のレーザーを4、5発連射。

エリオはそれを転がってよけるが、？型はその腕のようなものでエリオを突き飛ばす。

「え……」

エリオが突き飛ばされたのを見て、キャラは昔を思い出す。

Sideキャラ

とある一室。

そこでは私と管理局の局員、金髪の女性が立っていた。
そこで私は用意されていた椅子にじっと座っている。

「確かに、凄まじい能力を持っているんですが、制御がろくにできないんですよ。竜召喚だつてこの子を守ろうとする竜が勝手に暴れまわるだけで。とてもじゃないけど、まともな部隊でなんて働けませんよ。精々単独で殲滅戦に放り込むくらいしか……」

局員は好き勝手言っている。

「ああ、もう結構です。ありがとうございました」

金髪の女性は手で局員を制止しながら話す。

「では――」

次はどこに行くんだろうか？

この局員の言うとおりどこかの殲滅戦に行かされるのだろうか？
そんなことを考えながら、女性の次の言葉を待つ。

「――いえ、予定通りこの子は私が預かります」

「え……?」

そのまま女性につれて出された。
外は雪が降っていた。
女性は私にマフラーをかける。

「私は今度はどこに行けばいいんでしょう…?」

この人も私をどこかへ連れて行くんだろう。
そう思った私は女性に次の場所を聞いた。
しかし、思ったものと違う答えが女性の口から放たれた。

「それは君がどこに行きたくて、何をしたいかによるよ?」

「え…?」

「キャラはどこに行つて、何をしたい?」

そう言つて金髪の女性は私に向かってほほ笑んだ。

考えたこともなかった。

私の前にはいつも私がいちゃいけない場所があつて…。
私がしちやいけないことがあるだけだったから…。

「うわああああ!!!」

エリオくんの叫び声で私は現実へと引き戻される。
そして、エリオくんはガジェットにつかまれて、先程のレーザーで
開いた屋根をこじ開けエリオくんを投げる。
エリオくんは気絶してされるがままに放り出される。

「エリオくん!!!」

そして、私も思うがままに……エリオくんを助きたい一心でリニアレールから飛び降りる。

S i d e O u t

『ライトニング04飛び降り!? あっあの2人、こんな高高度でリカバリーなんて!!』

「いや、むしろあれでいいです」

ジyunが小さくつぶやく。

『せや』

通信ではやてがそれに答える。
そして、なのはも通信に割って入る。

『そう。発生元から離れば、AMFも弱くなる。使えるよ、フルパフォーマンスの魔法が!!』

S i d e キ ャ ロ

(守りたい。優しい人、私に笑いかけてくれる人達を……)

落下しながらエリオに手を差し出し

(自分の力で)

「守りたい！」

手を握る

《drive ignition》

ケリユケイオンが光輝き、ピンク色のバリアがエリオくと私を包み込んで浮き上がる。

そんな私たちにフリードが近づく。

ジュンさんは言った。

”落ち着いて、だけど素早く判断しろ”と。

”今回はフローする”と。

そう言ってくれた。

なら私はやるよ！！

「フリード、不自由な思いさせてごめん。私、ちゃんと制御するから」

フリードを見据え、決意する私の腕の中でエリオくんは気付いていた。

「いくよ！竜魂召喚！！」

バリアが強く光輝き、私の足元にピンク色の大きな魔法陣が展開される。

「蒼穹を走る白き閃光、我が翼となり天を駆けよ」

魔法陣から翼だけが現れる

エリオくんは足元で起こっていることに驚き、ケリュケイオンは一層強く光輝く。

「来よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚!!」

私の声と共に、魔法陣から大きくなったフリードが現れる。

「グオオオ!!」

『召喚成功!!』

『意識レベルブルー!! 完全制御状態です!!』

S i d e O u t

S i d e ジュン

「もう、あの二人には救援は入りませんね、リン曹長」

「ですね。さあ、私たちも早く列車を止めましょう!!」

「わかりました」

その後、レリックはスターズ分隊によって確保された。

ライトニングと僕は現場の事後処理の引き継ぎをしてファーストアラートは幕を閉じた。

S i d e O u t

S i d e ? ? ?

『 刻印ナンバー？、護送体制に入りました』

「 ほう」

『 追加戦力を送りますか？』

「 いや、やめておこう。レリックは残念だが、彼女たちのデータを取れただけで良しとしよう。それにしても——」

プロジェクトFの残滓を手に入れるチャンスがある。
今はそのことが重要だ。

「 ん？ この子は……」

私はある1人の男に目がいった。

「 おお…この子は！？」

プロジェクトFの最初の被検体ではないか！！
まさか、まだ生きていたとはな！！

「 フフフ…。楽しくなりそうだ！！」

第4話 ファーストアラート 後編（後書き）

はあ……疲れた…。

やっぱり戦闘はうまく書けないので、できるだけ避けました。

くっ…情けない…！

まあ気にしないようにしましょうか。

さて、ファーストアラート 後編

どうでしたでしょうか？

楽しんでくれたら幸いです、もう読めないという人は回れ右をしてください。

ですが…！

このあとちよつとおもしろい展開があるんですよ…！
私的にですがね…。

さてさて、次は派遣任務ですかね。

では、今回はこの辺で。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

第5話 出張任務？ それより先に模擬戦だ（前書き）

はい、約束通り3日ぶりに投稿します。

なんだかんだで、また模擬戦になってしまいました。やはりなのは二次創作を書くにあたって戦闘描写は避けられない。

ということで、練習がてらに書くことにしました。

では、どうぞ。

第5話 出張任務？ それより先に模擬戦だ

第5話 出張任務？ それより先に模擬戦だ

S i d e ジ ュ ン

「出張任務…ですか？」

「せや」

いきなり部隊長室に集められた隊長陣。

何でも、機動六課の後見人の一人である聖王教会の依頼だとか。

「ロストロギア…ですか」

「そうなんよ。うちはレリック専門なんやけど、どこも手が空いとらんっていうし…」

「それが巡り巡って僕たちに？」

「そういうことや」

なるほどね。

となると、危険度のわからないものなら六課全員で出動になるか。

「危険度は？」

「不明らしいわ」

「場所は？」

そこで八神二佐は不敵な笑みをしてきた。
そして、高町教導官、母さんを一瞬見た。
いかにもニヤリというのが似合うような顔だ。
でも僕はそれだけで大体の察しはつく。

「なるほど、その笑みからして管理外世界の97番惑星名”地球”
というところですね」

「つまらんなあ。なんでわかったん？」

簡単だ。八神二佐が笑みを浮かべた。

それは楽しみだということ。

つまり、八神二佐のゆかりの地、または何度も訪れたことのある世界。

そうになると自然と数は絞れてくる。

さらに、八神二佐が二人を見た。

ということは、二人にも行ったことがある世界。

すなわち、この三人の出身地である”地球”以外にはほとんどありえない。

「なるほどな。なあ、ジュンくん？」

「はい、なんでしょう？」

「諜報部が手薄や。そこに行く気は——」

「——ないです」

「さやか…」

出発は二時間後ということだけを告げ、解散した。
半分休日感覚なのでラフな格好でいいと言われた。

「ジュン、ちょっといいか？」

部屋を出たところでシグナム二尉に呼び止められた。

「何でしょう？」

「模擬戦しないか？」

「……は……？」

10分後。

あれからシグナム二尉にせがまれ訓練場に移動した。
シグナム二尉曰く。

——小細工なしでお前と戦ってみたい、だそうだ。
こちらとしてはすごく迷惑だ。

これから任務というのにいきなり模擬戦だなんて…。
任務と分かっているのなら、その任務成功のためにコンディション
をベストに戻すために休むのもだ。
それをいきなり…。

承認した八神二佐も八神二佐だ。

『準備はいい、ジュンくん？』

「いいですよ、高町教導官」

『じゃあ、模擬戦のルールは飛行なし、幻術なしのクリーンヒットが決まったらやめね？』

「わかりました」

一応魔法は使っていないんですね。
僕一個しかないけど…。

『では、両者ともにバリアジャケットを展開してください』

高町教導官の指示でシグナム二尉がバリアジャケットを展開させる。

「僕らも行くつか」

御意

「アサシン、セットアップ」

s t a n d b y l a d y s e t u p

そう告げると黒い光が僕を包む。

そして、いつもの軍服調のバリアジャケットが展開される。

『では、制限時間30分。模擬戦始め！！』

S i d e O u t

なのはの合図とともにシグナムがまっすぐ進んでくる。

「はああ!!」

その声と同時にレヴァンティンが横一線に払われる。

ジューンは後ろに大きく後退。

左脇についているナイフを素早く取る。

「ソニッククムーブ」

そして、ソニッククムーブを使用し、シグナムまで接近する。

ナイフでシグナムの顔に三連の突きを放つ。

しかし、シグナムはそれを紙一重で回避。

そのままレヴァンティンを振るう。

ジューンの左下からレヴァンティンが迫る。

しゃがんで回避し、シグナムの腹にこぶしを放つ。

「ぐっ……!!」

シグナムはその攻撃で吹き飛ぶ。

S i d eなのは

「なにあれ？」

私とフェイトちゃん、ヴィータちゃんにFW陣は二人の模擬戦を観戦している。

ジューンくんの動きは洗礼されたようにスムーズに動いている。

そして、シグナムさんはジューンくんのパンチで吹き飛ぶ。

あれは絶対普通のパンチじゃない。

何か秘密がある。

そう私の勘が告げる。

だから、一番知ってそうなフェイトちゃんに聞く。

「あれは純粹に魔力を拳に集めて、当たったと同時に放つ技だよ」

「そんなことできるのか？」

ヴィータちゃんも不思議に思っている。

「あれは危険な技だよ。魔力操作を間違ったら魔力が暴走して破裂、最悪の場合手が吹き飛んじゃうんだ。でもね、ジュンはよくわからないけど魔力操作が上手いの。私が教えた”ソニックムーブ”を一部分に発動して蹴りやこぶしの速度に緩急をつけて戦ってた」

フェイトちゃんのいうことをまとめると、

ジュンくんは魔力の制御がうまくて、ソニックムーブを自分なりに改造して、自分の腕とかに速度の緩急をつけている。

こういうこと？

「え、それって負けることあるの？」

フェイトちゃんでも勝てないんじゃないかな？
幻術もあるし。

「私はジュンに負けたことはほとんどないよ？」

「あれに勝てるの？」

「あれって……。勝てるよ」

（ジユンに魔法の才能があったら絶対勝てなかったけどね）

フェイトちゃんが念話を飛ばしてきた。

（そうなの？）

（あの魔力制御に魔法の才能なんかあったら間違いなくストライカーだよ。今でもエース級なのに）

「にははは」

S i d e O u t

S i d e ジュン

「なかなか打ち合えるではないか、ジュン」

「あれは打ち合ったとは言いませんよ。逃げて、逃げて、逃げて相手の癖と隙を観察してようやく戦えるのですから」

「しかし、今回は見定めていないぞ？」

その通りだ。

一度しか戦ったことがない人相手の癖などわかりはしない。それに向こうは高水準の万能型。

どんな手を使ってもそれをつぶせる感とセンスがある。

この勝負、始める前からわかっていたことがある。

——勝機は、ない。

切り札の幻術は使えない。

使えるのは魔法と己の体のみ。

さらに、魔法はソニックムーブしかない。

ならおのずと攻撃手段は少なくなる。

ソニックムーブを使用しての高速戦闘。

あるいは魔力衝撃での戦闘。

僕にはこの二択しかない。

しかし、一つ目の選択はあまりに効果は薄いはず。

シグナム二尉は高速戦闘に慣れている。

管理局最速の母さんとの戦い。

まだそこまでたどり着いていない僕が相手ではすぐに捕捉されるのが落ちだ。

二つ目の眼選択肢は速度がない分対処されるのが早い。

使えるのは最初の一撃のみ。

それもさつき使ったのもうあてることができないだろう。

それなら拳の速度を変えればいい。

もうこれしかない。

僕はナイフをしまう。

そして、シグナム二尉が僕に向かってまたも駆ける。

S i d e O u t

シグナムはレヴァンティンを上から振り下ろす。

ソニックムーブ

アサシンの声と共に黒い光が右にずれる。

レヴァンティンは空振り、後ろからジユンが迫る。

右腕を振りかぶりシグナムの顔面めがけて放つ。

首を左に逸らし、右回転してレヴァンティンをふるおとする。

「ぐっ!!」

しかし、シグナムは振れなかった。

ジユンは右拳と同時に左の足をあげて蹴りを放っていた。

その攻撃により、シグナムは背中に思い蹴りを受ける。

Sideシグナム

私が見切れなかった？

そんなはずはない。

確かに右ストレートも蹴りも見切っていた。

しかし、私の反応速度がジユンの蹴りより遅かった。

あの速度の蹴りならば確実にレヴァンティンのほうが早くジユンにあたっていた。

ジユンの強さは幻術だけではないということか……。

認めよう、お前は強い!!

「さあ、見せてくれ!! お前の強さを!!」

楽しい……。

楽しいぞ、ジユン!!

S i d e O u t

S i d e ジュン

くそ、これだから嫌いなんだ。戦闘狂は。
手を抜いたら怒るし、負けたらまた挑んでくるし…。
もう嫌だ…。

「レヴァンティン、カートリッジロード!!」

レヴァンティンから、薬莢^{やじょう}が二個出てくる。

紫電一閃ではない。

あれは横一線が最大の効果範囲。

高速戦闘、さらに攻撃の速度に緩急をつけた僕には追い付かない。
ならば可能性が一番高いのは飛竜一閃。

鞭状に変形させれば今よりか柔らかい対応ができる。

飛竜一閃…警戒が吉…。

S i d e O u t

S i d e フェイト

ジュンはシグナムの飛竜一閃を警戒してる。

紫電一閃ではジュンの柔軟な攻撃には対処できない。

実際私もそこそこ苦戦を強いられたことは何でもある。

数少ない情報から最善の選択を選び、戦うジュン。

そんな戦い方は他には誰もいなかった。

相手の手の内をわずか数合打ち合っただけで把握するのは至難の業

———というか無理。

でも、ジューンは天候や相手の一挙手一投足からすべてを考慮のうちに入れておく。

その中から必要な情報をピックアップし、実行。

それを繰り返し、相手切り札を引き出す。

そんな戦い方を主としている。

優れた観察眼と情報処理能力。

これがジューンの最大の武器。

私はそう思っている。

だからジューンは基本は単独で動く。

多くても3人、5人の小隊に満たないような人数。

でも、今回ジューンは勝てない。

ジューンも分かっているはず。

シグナムとジューンの決定的な違い。

単純なジューンの経験不足。

それがジューンの足を引っ張る。

飛竜一閃をシグナムが放ったらジューンは確実に負ける。

私はそう思う。

「ジューン……」

S i d e O u t

ジューンは動こうとはしない。

シグナムも同じように動かない。

静かに構えたまま2人は動こうとはしない。

そんな時間が何分続いただろう。

1分に満たなかったようにも思えるし、10分以上だったようにも思える。

その中最初に動いたのは――

「ふっ！！」

ジュンだった。

ナイフを素早く抜き、シグナムに投擲。

シグナムはそれに向かって走り出す。

ナイフはシグナムの頬を掠める。

頬から赤い血が少し吹き出る。

そして、十分に迫ったところでレヴァンティンを抜く。

「飛竜一閃！！」

その声と同時にレヴァンティンの刃が個々に離れ、連結刃が姿を現す。

ジュンはそれを見ると同時にシグナムに向かって走る。

シグナムは離れた刃でジュンの行く手を阻む。

自身をソニックムーブで加速させ、当たりそうになった瞬間に速度を緩めたりし、当たらないように調節する。

「何！？」

それを繰り返し、シグナムの目の前まで接近する。

そして、拳を前に出すその瞬間にジュンの意識は途絶えた。

よく2人を見るとシグナムの鞘がジュンの腹に当たっていた。

「楽しかったぞ、ジュン」

ジュンが最後に聞いたのはシグナムのその一言だった。

第5話 出張任務？ それより先に模擬戦だ（後書き）

疲れた……。

戦闘はもう書きたくない…そんな感じしかありません。

文才がほしい…。

そう嘆くのが最近の日課（？）になっています。

それにしても、ジュンくんやっぱ強いね。

いや、そこまでチートにはなっていないよね？

まあいいや。

感想くれたうれしいです。

では、次こそ海鳴にて。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

第6話 出張任務 海鳴へ 前編（前書き）

まず最初に…

すいません！！

投稿が意外と遅れました…。

予定では一昨日くらいにはできてる予定でしたが、いつの間にか今日になってしまつて…。

さて出張任務です。

あんまりおもしろくないです。

正直書いてても面白くないと思いました。

それでもという方はどうぞ。

第6話 出張任務 海鳴へ 前編

第6話 出張任務 海鳴へ 前編

S i d e フ ェ イ ト

ジュンとシグナムの模擬戦は予想通りジュンの負けで幕を下ろした。やはりジュンにシグナムの相手はまだ無理。そう確信した。

「もう、シグナムさんやりすぎですよ!!」

なのはがシグナムに怒ることです先の戦闘から思考を離れた。そして、ジュンを抱えたシグナムを見る。ぐったりしてるジュン。

シャルがジュンの服をまくる。

「痣になってるわよ、シグナム」

お腹には青い痣がある。

それを見た瞬間私の思考は停止した。

S i d e O u t

S i d e な の は

ジュンくんの模擬戦が終わり、シグナムさんがジュンくんを抱えてこっちに近づいてくる。

「もう、シグナムさんやりすぎですよ!!」

こんな小さな子にしていることではない。

それはジューンが魔導師であってもそう考えてしまっ。

近くまで来ていたシャマルさんにジューンくんを見てもらっ。

「痣になってるわよ、シグナム」

かわいそうに…。

シグナムさん試合の最中ものすごくいい笑顔でジューンくんを見ていた。

これからもシグナムさんに模擬戦を頼まれるんだろうな……。

そう思ったからこそジューンくんはかわいそうだ。

しかし、いつもならジューンくんのことを心配して真っ先に声をかけるフェイトちゃんが今はなんかおとなしい。

フェイトちゃんの方を見ると、そこには静かに怒り狂うフェイトちゃんがいた。

正直怖い……。

こんなフェイトちゃんを見るのは久しぶりだ。

フェイトちゃんはそのままシグナムさんに近づくと怒りだした。

その説教(?)はこのあとの出張任務出発10分前まで続いた。

S i d e O u t

S i d e ジューン

「ん……」

「あ、起きた？」

「ここは…？」

起きると目の前に母さんの顔があった。

寝ぼけた頭でも一つだけ理解できる。

僕はいま母さんに膝枕されている。

家族だから恥じらう意味もない。

だけど、一応起き上がろうとする。

「ダメ、今は寝ときなさい？」

額を軽く押されてまた膝の上に戻る僕。

腹もなぜか痛い。

模擬戦で負けたことはわかるが、負けた経緯がわからない。

それでも、この痛みは負けた時に受けた痛みだろう。

情けない…。

勝てないことは理解していた。

模擬戦では母さんに負け続けているから負けることもさして怖くはなかった。

でも、悔しい。

2年前、母さんに救われたこの命。

何か恩返しがしたいと思っていた。

その時、リンカーコアが自分には存在すると知った。

うれしかった。

これで魔導師になれば母さんに恩が返せる——そう思っていた。

しかし、現実はいつも僕の邪魔をする。

僕には魔法を行使する才能が皆無だった。

士官学校に入ってから知ったことだ。

代わりに幻術の才が高かった。

僕は幻術を高めるために訓練した。

キツイと思うことも、挫折しかけたこともあった。

だけど、これは僕が選んだ道。

一流の魔導師になつて母さんを手伝う。

ただそれだけのためにキツイ訓練にも耐えた。

でも、限界はあった。

幻術はどう頑張つても決め手にはならない。

相手の精神は壊せるが、それで相手が止まるのは二流まで。

一流にはかなわない。

だから徒手格闘の訓練を積んだ。

幻術の訓練には士官学校の候補生と教官相手に行った。

僕が”できない”訓練の時に”できている”幻術を見せたりしてた。

そうして、士官学校は1年で卒業。

卒業してからの1年も幻術でどうにかしてきた。

母さんには簡単な魔法を教えてもらった。

それが”ソニックムーブ”だった。

あとはアレンジと応用で今の使い方まで持ってきた。

傲慢するわけではないが、管理局内では”絶対強者”なんても呼ばれてる僕が幻術ひとつ抑えられただけであつさり負けた。

悔しくないわけがない。

もうよそう、考えるのは…。

今はおとなしく休もう。

「少し、寝るよ」

「……うん、おやすみ」

S i d e O u t

S i d e F e i t

「少し、寝るよ」

そういったジユンは腕で目を隠す。

しかし、私には見えた。

隠す寸前のジユンの目には涙がたまっているのを。

そして、隠した目から涙が流れる瞬間を…。

泣いているジユンは久しぶりに見る。

「……うん、おやすみ」

何を考えているの、ジユン…。

S i d e O u t

ジユンが眠りについてすぐに地球の海鳴市に着いた。

「ここがなのはさんたちの故郷…」

「ミッドと変わりませんね？」

ティアナ、スバルの順でなのはに聞いていく。

「にははは」

なのははただ笑うのみ。

「というか、ここは具体的にはどこでしょう？　なんか、湖畔のコーナーって感じですが…」

「現地の住人の方がお持ちの別荘なんです。捜査員の待機所としての使用を快く許諾していただけたですよー!!」

「現地の人…ですか…ん？」

そんな会話をしているときに一台の自動車が近づいて停止した。

「自動車？ こっちにもあつたんだ…」

「ティアナはどんな世界を想像してたのかな？」

なのはの質問にティアナは苦笑いを浮かべるだけだった。

そして、自動車のドアが開き、降りてきたのは金髪の髪色の女性だった。

「なのは、フェイト!!」

「アリサちゃん!!」

大声でなのはたちの名前を呼んだのはなのは、フェイト、はやての親友であるアリサ・バニングスだった。

なのははアリサの名前を呼んで駆け寄るが、フェイトは駆け寄るどころか名前すら呼ばなかった。

ゆっくりなのはとアリサに近づいたフェイトが言った第一声とは――

「静かにしてくれる？ ジュンが起きちゃうから」

――だった。

フェイトは今ジュンを背中に背負っている。

ジューンは規則正しい寝息を立てている。
どうやら起きる様子はない。
それを見てなのはとフェイトが安心する。

「ごめんね、フェイトちゃん」

いいよ、小声で返すフェイト。
そこにアリサの声が割って入る。

「フェイト、その子は？」

「私の息子のジューン・T・ハラウンだよ」

息子といっても養子だけどね、と付け足しアリサは納得した。

「あ、紹介するね？」

フェイトはいち早く蚊帳の外となっているFWメンバーに気づき、
アリサを紹介する。

「私やなのは、はやての親友で、幼馴染の……」

「アリサ・バニングスよ。よろしくね？」

「……よろしく願います!!」「……」

「……みんな声大きいよ？」

フェイトが黒いオーラを纏って4人に言う。
すると4人は――

「……すいません……」

と謝るのだった。

「そういえば、はやてたちは？」

「別行動です、違う転送ポートから来ると思うので……」

「たぶん、すずかの所に……」

リンが答え、フェイトが続けて説明する。

「さて、じゃあ改めて今回の任務を簡単に説明するよ？」

「……はい……」

なのはの言葉に全員が仕事モードへ移行する。なのはが海鳴の簡易地図を展開しながら説明を始める

「搜索地域はここ、海鳴市の市内全域。反応があつたのは……ここと、ここと、ここ」

地図に印がついていく。

「移動してますね？」

「自立型か……？ もしくは誰かが持っているか？」

「ジュン？」

いきなり起きたジュンの言葉にフェイトが驚き、ジュンに呼びかける。

「何、母さん？」

「いつ起きたの？」

ついさっき、と言ってフェイトの背中から降りる。

「その報告はまだないね」

ジュンはその場で考え込む。

「現状では自立型の線が大きいですね。でも相手はロストログア…油断は禁物です」

「そうだね。場所も市街地だから…」

「副隊長たちには後で合流してもらうとして、僕たちは先行しましょうか」

「うん。じゃあ、スターズは中距離探索、ライティングは車を使ってサーチャーとセンサーの設置」

「了解です」

ジュンとフェイト、エリオ、キャロは自動車に乗り込んでいった。

第6話 出張任務 海鳴へ 前編（後書き）

ども、1週間ぶりですね。

いや、出張任務難しいです。

あんまり聞いたことないので他の人の流れを参考に適当に作るしかないです。

すいません。

私に文才がないばかりに…。

でも！！

読んでくれている皆さんのために全力で書いていきますのでよろしくお願いします！！

今回はこの辺でいいですかね？

最後まで読んでくれてありがとうございます！！

第7話 出張任務 海鳴へ 中編（前書き）

出張はこれで終了にさせたかったです…。

残念ながら長くなるので今回は中編ということで、途中で切りました。

では、どうぞ。

第7話 出張任務 海鳴へ 中編

第7話 出張任務 海鳴へ 中編

S i d e ジュン

ライトニングでサーチャーを設置し続けて1時間。
大体の設置が終わった。

モンディアル陸士とルシエ陸士は初めての設置ということで少し手間取っていたが、母さんとフォローした。

単に順応能力が高いのか、またはただの器用貧乏なのか…。

ルシエ陸士とモンディアル陸士はサーチャーの設置を次々に行っていく。

おかげで2時間はかかると思われたこの作業を半分で終わった。

「意外と早く終わったね、ジュン」

「そうですね」

今は休憩中で母さんが飲み物を奢ってくれた。

モンディアル陸士たちはお茶を母さんは紅茶、僕はコーヒード。

P i P i P i P i P i P i ! !

「あ、なのはからだ」

「そうですね」

「ごめんね、ちょっと出てくる」

そう言つて少し離れる。

S i d e O u t

S i d e フェイト

「もしもし、なのは？」

『フェイトちゃん？ 今翠屋にいるんだけど』

「翠屋？ ケーキでも買つてたの？」

『手ぶらで行くのも気が引けるからね。でね、ゆっくりでいいから翠屋に来てほしいの』

「うん。わかった」

『じゃあ、お願いね』

そう言つて電話は終わった。

私の車に全員乗るか分からないけどね……。無理だったら往復しよう。

S i d e O u t

S i d e ジュン

母さんが翠屋に行くと行って、車を走らせて数十分たった。

喫茶翠屋。

高町なのはの実家で、海鳴市では有名なケーキ店。
マスターの高町士郎は御神流の後継者だが、現在は引退。
長男の恭也が後を継ぐ。

ふむ。

御神流ってなんだ？

「ジュン、着いたよ？」

「あ、はい」

どうやら着いたようだ。

喫茶店のドアを開けて中に入っていく。

「いらっしやいませ」

と中にいる高町家の皆さんが言ってくる。

高町教導官は母さんを見て笑って寄ってくる。

「いらっしやい、フェイトちゃん」

「久しぶりね、フェイトちゃん」

「はい、お久しぶりです桃子さん」

「あら、その子は？」

あ、やっとこつちに気がついた。

もう勤務時間過ぎてるからなのはさんでいいよね？

……いいよ、ね？

「はじめましてジュン・Ｔ・ハラウンと言います」

「テストロッサ・ハラウンってことは…」

「はい、フェイト・Ｔ・ハラウンの息子です。養子ですが」

「あら、そうなの？」

「はい、あなたはなのはさんのお母さんですよね？」

「ええ、そうよ。高町桃子っていいます。よろしくね？」

「はい、よろしくお願いします。いや、それにしてもお若いですね」

「あら、やだ。お世辞がうまいわね？」

「いえいえ。世辞などはなく本心ですよ」

「桃子はやらんぞ？」

「失礼。なのはさんのお父さんでしょうか？」

「あ、ああ。高町士郎だ」

「いやはや、お父さんもお若い」

「僕にもお世辞かい？」

「いえ、まだまだ現役でしょうに。よかったですね土郎さん。きれいな人と結婚できて。羨ましいですよ」

「いや、君にもいい人はできる。だからあきらめてはいけないよ？」

「いや、ここまできれいな人はそうそういませんよ」

それから世間話がしばらく続いた。

S i d e O u t

S i d e なのは

フェイトちゃんが来てすぐにジュンくんがお母さんと自己紹介しに行った。

「はじめましてジュン・Ｔ・ハラオウンと言います」

名前で少し気になったのかお母さんはフェイトちゃんのほうに視線を向ける。

「テストロッサ・ハラオウンってことは…」

「はい、フェイト・Ｔ・ハラオウンの息子です。養子ですが」

やはり、という顔でジュンくんの話聞く。

「あら、そうなの？」

それでも理由は聞かない。

私とフェイトちゃんは少し苦い顔をしてると思う。
ジユンくんは境遇がひどかった。
でも、話すことはできない。

「はい、あなたはなのはさんのお母さんですよね？」

「ええ、そうよ。高町桃子っていいいます。よろしくね？」

軽く挨拶をする。

「はい、よろしくお願いします。いや、それにしてもお若いですね」

あ、なんだか世間話が始まった。

その言葉で殺気を放たないでお父さん。

「あら、やだ。お世辞がうまいわね？」

「いえいえ。世辞などではなく本心ですよ」

お父さん…ジユンくんにかかしたら”お話”なの……。

「桃子はやらんぞ？」

「失礼。なのはさんのお父さんでしょうか？」

お父さんの放つ殺気を華麗にかわすジユンくん。
見事だ。社交的な話がうまい。

「あ、ああ。高町士郎だ」

毒気を抜かれたお父さんが自己紹介をする。

「いやはや、お父さんもお若い」

「僕にもお世辞かい？」

皮肉のつもりお父さん？

「いえ、まだまだ現役でしょうに。よかったですね土郎さん。きれいな人と結婚できて。羨ましいですよ」

いつの間にかただの世間話に戻ってるよ？

「いや、君にもいい人はできる。だからあきらめてはいけないよ？」

「いや、ここまできれいな人はそうそういませんよ」

フェイトちゃん…

フェイトちゃんに念話を飛ばす。

……何？

ジュンくんって……なんか色々すごいよね

そうだね……

うん、みんな同じ意見だよね…。

Side Out

S i d e ジュン

あのあとアリサさんの別荘に行くために車に乗ろうとしたが…。

「ごめん、ジュン。席足りない…」

とのことですよ。

ですから、助手席に座っているのはさんの膝の上に座らされている。

「〜」

なのはさんはすごく上機嫌。
反対に母さんは…。

「むー…」

運転しながらもすごく不機嫌。

という感じで別荘につきました。

S i d e O u t

第7話 出張任務 海鳴へ 中編（後書き）

投稿遅れて申し訳ありません。

もう2週間は放置してましたね。
ほんとすみません。

あと少しで安定した投稿になると思うので、それまでは不定期で投稿します。

感想、どしどし送ってください。

批判などは勘弁してほしいですけど…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0250z/>

魔法少女リリカルなのは StrikerS ~小さな少年の小さな勇気~

2012年1月7日02時52分発行